



東京新聞で、国立西洋美術館「内藤コレクション中世の写本」展覧会の記事を読み、飛んで行きました。館内で「写本」を寄贈した内藤氏のコメントを読みました。

パリのセーヌ川沿いに続く屋台の古本屋で見つけました。金に赤や青という派手な色でありながら、折り目正しさがあり、一方で、よく見ると狭い世界の中に、融通無碍なデザインが隠れるようにちりばめられていて、おおらかな遊び心が見えてくる。そのたくまざる品の良さに、食い入るように見入った。

私も食い入るように見入りました。中世ラテン語の聖書、詩篇、典礼用聖歌、時祷書など、羊（獣）皮紙に書かれた150点以上の写本がガラス越しに展示されていました。写本はページごとになっていますが、裏も透けてみえる、本当に薄い紙状のものです。

写本の現物を、多数、多種、間近で見たのは初めてです。写本の1ページの大きさはB6くらいから、A4までありましたが、聖歌などは大勢で見る必要からか、さらに大きめでした。

作者（模写者？）は特定の人もありましたが、ほとんどが無名で、一定の様式、緻密さ、また、原本の写しであれば、職人技が必要で、おそらく修道僧によるものではないかと想像します。

中世ラテン語のアルファベットが、薄い罫線に沿って非常に小さく整って書かれています。聖書は2段組です。一枚の紙に数多くの文字を詰めて書き、更に美しさも必要なためゴシック体のカリグラフィの文字となっていて、なかなか読み取れません。最初の文字は大きな装飾文字としてデザインが施され、几帳面で、緻密なものです。そこに金、赤、青などの美しい彩色が丁寧になされています。余白にも草花、小動物、想像上の悪鬼のようなものが配置されていて、緻密で、美しく、滑稽みもたっぷりあり、面白い装飾となっています。いかにも中世的だと感じさせられます。



また、伝統的な聖書の絵が描かれているのも多数あります。どの絵も、当然とは言え、似ています。また、聖歌の四線譜も多数あります。グレゴリアン・チャントと言われているものでしょうか、当時は単旋律で歌ったと言われていたようですが、今も聞くことができます。

当時は聖書を読み、聖歌を歌い、祈禱するのは聖職者だけです。また、中世ラテン語は教会の言語と決められ、一般の人は其々の土地のラテン語を使っていました。写本を手にするのができたのは王侯貴族など、限られた人々だけでしょう。美しく、楽しい写本が残されて、当時に思いを馳せることができるのは嬉しいことです。500年以上も前に生きていた人が、大切に使っていたものを、時空を超えて、直に見られる喜びを感じます。『讚美歌 21』にも、時代を超えて、10篇のラテン賛美歌が収録され、受け継がれています。